

陶淵明「帰園田居」五首の作と楽府との関連について

沼口 勝

一

陶淵明の「帰園田居」五首の連作は、晋の安帝の義熙元年（乙巳・四〇五）、作者が彭沢の令を辞して帰田した、その翌年の義熙二年（丙午・四〇六）四十二歳の制作であるとされてゐる（宋の呉仁傑『陶靖節先生年譜』⁽¹⁾）。

ところで五首のうち、其一、其二、および其三の詩中に、漢の楽府古辞との関連を疑わせる表現が認められる。以下それを緒として、この連作と楽府の世界との関連を探索したいと思う。まず「帰園田居」其一の詩を掲げよう。

- 1 少無適俗韻 少くして俗に適うの韻なく
- 2 性本愛丘山 性 本より丘山を愛す
- 3 誤落塵網中 誤りて塵網の中に落ち
- 4 一去三十年 一たび去りて三十年

- | | |
|----------|-----------------------------|
| 5 羈鳥戀舊林 | 羈鳥 旧林を恋い |
| 6 池魚思故淵 | 池魚 故淵を思ふ |
| 7 開荒南野際 | 荒を開く 南野の際 |
| 8 守拙歸園田 | 拙を守りて園田に帰る |
| 9 方宅十餘畝 | 方宅 十餘畝 |
| 10 草屋八九間 | 草屋 八九間 |
| 11 榆柳蔭後簷 | 榆柳 後簷を蔭い ^{おほ} |
| 12 桃李羅堂前 | 桃李 堂前に羅 ^{つら} なる |
| 13 曖曖遠人村 | 曖曖たり 遠人の村 |
| 14 依依墟里煙 | 依依たり 墟 ^{ところ} の煙 |
| 15 狗吠深巷中 | 狗は吠ゆ 深巷の中 |
| 16 雞鳴桑樹巔 | 雞は鳴く 桑樹 ^{いただき} の巔 |
| 17 戶庭無塵雜 | 戶庭 塵雜無く |
| 18 虛室有餘閑 | 虛室 餘閑有り |
| 19 久在樊籠裏 | 久しく樊籠 ^{うち} の裏に在りしも |

20 復得返自然 復た自然に返るを得たり

五言二十句から成るこの一篇は、出仕していた俗世間への厭惡の情を示すことば、すなわち塵網、塵雜、樊籠などに對し、ようやく帰還し得た故郷の園田への深い愛着を語るそれが、溢れるようにゆたかに綴られている。その第9句から四句に園田の居の簡素なたたずまいを描写したのち、第13句からの四句に遠くの村里とその狗吠雞鳴の景を写している。

ところでこの「狗吠深巷中、雞鳴桑樹巔」(第15・16句)は、清の陶澍『靖節先生集』に「吳正伝詩話に、古雞鳴行、雞鳴高樹巔、狗吠深宮中という、陶公全く其の語を用う」と指摘しているように、漢の樂府古辞「雞鳴」の「雞鳴高樹巔、狗吠深宮中」二句を襲用したものであろう。しかも隆洪温『新譯陶淵明集』の【賞析】の項に評するように、樂府古辞中の「高」「宮」二字を「桑」「巷」の二字に換えながら、その痕跡を讀者に感じさせることなく、典拠のあることさえまったく気づかせず、詩中に自然に融けこんでいるのである。⁽²⁾ みごとな修辞というほかはない。それでは次に典拠と見なす「雞鳴」の古辞(宋の郭茂倩『樂府詩集』卷第二十八「相和歌辞三、相和曲下」による)について考えてみよう。

雞鳴 古辞

- | | | |
|----|-----------------------|-----------------------------|
| 1 | 雞鳴高樹巔 | 雞は鳴く 高樹の巔 |
| 2 | 狗吠深宮中 | 狗は吠ゆ 深宮の中 |
| 3 | 蕩子何所之 | 蕩子 何く ^ゆ に之く所ぞ |
| 4 | 天下方太平 | 天下は方 ^き に太平 |
| 5 | 刑法非有貸 | 刑法は貸すこと有るに非ず |
| 6 | 柔協正乱名 | 柔協こそ正に名を乱す |
| 7 | 黄金爲君門 | 黄金もて君が門と爲し |
| 8 | 璧(一作碧) 玉爲軒堂 | 璧玉もて軒堂と爲す |
| 9 | 上有雙樽酒 | 上には双樽酒有り |
| 10 | 使作邯鄲倡 | 邯鄲の倡を使作す |
| 11 | 劉王(逢欽立作玉) 碧青璧 | 劉王は碧青 ^{しきがわら} の璧 |
| 12 | 後出郭門王 | 後に郭門の王を出だす |
| 13 | 舍後 ^{しやご} 有方池 | 舍後に方池有り |
| 14 | 池中雙鴛鴦 | 池中に双鴛鴦あり |
| 15 | 鴛鴦七十二 | 鴛鴦は 七十二 |
| 16 | 羅列自成行 | 羅列して自ずから行を成す |
| 17 | 鳴聲何啾啾 | 鳴く声 何ぞ啾啾たる |
| 18 | 聞我殿東廂 | 我が殿の東 ^{ひだり} の廂に聞こゆ |
| 19 | 兄弟四五人 | 兄弟 四五人 |
| 20 | 皆爲侍中郎 | 皆 侍中郎と爲り |

- 21 五日一時來 五日にして一時に來たり
 22 觀者滿路傍 觀る者 路傍に滿つ
 23 黃金絡馬頭 黃金もて馬頭に絡う
 24 頻頻何煌煌 頻頻として何ぞ煌煌たる
 25 桃生露井上 桃は露井の上に生じ
 26 李樹生桃傍 李樹は桃の傍に生ず
 27 蟲來齧桃根 虫來たりて桃の根を齧めば
 28 李樹代桃殫 李樹は桃に代わつて殫る
 29 樹木身相代 樹木すら身ら相代わるに
 30 兄弟還相忘 兄弟還つて相忘るとは

この一篇は、明の馮惟訥『古詩紀』卷十六・漢第六「樂府古辭・雞鳴」に「此の曲の前後、辭相屬かず、蓋し詩を采り樂に入れ、合して章を成せるか。抑も錯簡案誤有るか。」と評するように、文脈語意の通じないところがある。殊に第11・12句は文意通じがたい。遼欽立はその著『先秦漢魏晉南北朝詩 上』卷九「樂府古辭」の「雞鳴」篇の後、「遼案ずるに、歌中の劉玉碧青壁後出郭門王の十字、脱誤有り。書鈔百十二樂府歌を引きて云う、名倡劉碧玉と疑うらくは即ち此れ上の句の原文ならん。今本殆ど上の句の倡の字を以て名倡の二字を脱去し、並びに碧玉を倒しまにして玉碧と為すなり。又新五代史三十七伶官傳に、郭門

高なる者、名は從謙、門高は其の優名なり云々と。疑うらくは此の郭門王も亦た倡人の名ならん。上に劉碧玉と言ひ、下に郭門王と言ふ、邯鄲倡樂の佳に眩う所以ならん。」と解釈している。⁽³⁾これに従ひたい。次にこの篇の要旨を三段落に区分して述べよう。

第一段落(冒頭く第6句) 語り手が蕩子に、雞鳴狗吠のこの天下太平の世であるからとて、法を犯せば容赦なく嚴刑が課される、この名分が混亂している時代、恩赦などを当てにするのは誤りであると戒める。蕩子とは、前漢末權勢を振るつた外戚王鳳の家の子弟を指す、また柔協は柔服(優柔姑息)の意に近いとするのは、ともに蕭滌非の説である。⁽⁴⁾

第二段落(第7句く第24句) 蕩子の家の豪奢なくらし、黃金碧玉で飾つた門や邸宅、邯鄲の倡と樽酒・名優、池に遊ぶ七十二対の鴛鴦、そして兄弟四五人が皆宮仕え、五日に一度の休沐の日に、宮中帰りの彼らの車列を観る群衆など、その華麗なさまを描写する。

第三段落(第25句く末尾) 露井のほとりの桃と李の木でさえも、桃がその根を虫に齧られれば李が代わつて斃れるものを、蕩子の家の兄弟は互にかばい合うことも知らない。

蕭滌非のいうように、「雞鳴」のうたは前漢末の外戚王鳳の一族を諷ったものであらう。

ところで冒頭「雞鳴高樹巔、狗吠深宮中」の対句の意味するところは如何にといえ、黄節はその著『漢魏樂府風箋』において、『史記貨殖列傳』に「老子曰く、至治の極、隣国相い望み、雞狗の声相い聞こゆ、と。」また同じく『律書』に「天下殷富、粟十餘錢に至り、鳴雞吠狗、烟火萬里、和樂と謂う可き者か」と。下故に「天下方に太平」と云うなり。』という。黄節の指摘する『史記』の二句を含む文を、それぞれ左に掲げる。

甲 老子曰、至治之極、鄰國相望、雞狗之聲相聞、民各甘其食、美其服、安其俗、樂其業、至老死不相往來。

(第四句以下の訓読) 民各其の食を甘しとし、其の服を美とし、其の俗に安んじ、其の業を樂しみ、老死に至るまで相往來せず。(貨殖列傳)

なお瀧川資言の【考證】に「言至治之世、不知有貨殖、王弼本老子下卷、無至治之極四字。」という。

乙 「孝文曰、(略)今匈奴内侵、軍吏無功、邊民父子荷兵日久、朕常爲動心傷痛、無日忘之。今未能銷距、願且堅邊設候、結和通使、休寧北陲。爲功多矣、且無議軍。」故百姓無内外之繇、得息肩於田畝、天下殷富、

粟至十餘錢、鳴雞吠狗、烟火萬里、可謂和樂者乎。

(訓読)「孝文曰く、(略)今匈奴内侵し、軍吏功無し。辺民の父子、兵を荷なうこと日久し。朕常に爲に心を動かし傷痛して、日として之を忘るる無し。今未だ銷距すること能わず、願わくは且らく辺を堅め候を設け、和を結び使を通じ、北陲を休寧せんことを。功を爲すこと多く、且つ軍を議すること無し、と。」故に百姓内外の繇無く、肩を田畝に息わすことを得、天下殷富にして、粟「斗・斛」十餘錢に至り、鳴雞吠狗、烟火萬里、和樂と謂う可き者か。(律書)

甲の文から、雞狗の声相聞こゆるのは至治の極のしるし、また乙の文から、鳴雞吠狗は民衆が戦争に駆り立てられることのない和樂の世のしるしとされていることが知られる。「雞鳴」篇の冒頭に、雞鳴狗吠の句を置いたのは、国都の太平を象徴させる意味からであらう。そして陶淵明が「歸園田居」其一に「狗吠深巷中、雞鳴桑樹巔」と二字を換えて巧みに自然に表現したのは、至治の極世、すなわち戦争に駆り立てられることのない真の平和境は、彼が帰還した園田居の村にこそあることを象徴させようと意図したのではなかったかと考えるのである。

郭茂倩、及び彼の引用する『樂府解題』によれば、「清調曲」の古辞「相逢行」は、「相逢狭路間行」、また「長安狭斜行」ともいい、文意は「雞鳴曲」と同じであるという。そこで「相逢行」を概略掲げて「雞鳴」との同異を見ることとしたい。

この歌も全文三十句、前後二段落からなり、その内容を述べると次の通りである。

前段（冒頭～第六句）相逢狭路間行、長安有狭斜行という別題が語るように、繁華な都会の、車二輛がすれ違うこともままならないような狭路（狭斜）において、語り手がそこで出会った若者に君の家はどこかと問い、返答を聴いてその家なら「知り易く復た忘れ難い」誰もがみな知る家だという。その箇所を左に示す。

- | | | |
|---------|--------|--------|
| 1 相逢狭路間 | 相逢う | 狭路の間 |
| 2 道隘不容車 | 道隘くして車 | を容れず |
| 3 不知何年少 | 知らず | 何れの年少ぞ |
| 4 夾轂問君家 | 轂を夾んで | 君の家を問う |
| 5 君家誠易知 | 君が家は誠 | に知り易し |
| 6 易知復難忘 | 知り易く | 復た忘れ難し |

後段（第七句～末尾）以下にその知り易く忘れ難い豪奢榮耀のさまを縷々描くのである。すなわち黄金・白玉で飾った門や堂、堂内での酒宴と邯鄲の倡楽、中庭の桂樹と華燈、宮仕えの三兄弟、その休沐の際の華やかな車馬の列、邸内の池に泳ぐ七十二対の鴛鴦と鶴の鳴き声、そして三兄弟の婦のそれぞれの様子と丈人（この家の主人夫婦）のこなど。「雞鳴」の末尾にあった皮肉をこめて譏るような表現はないが、「忘れ難い」豪奢榮耀のさまをほめなす描写そのものがそうしたはたらきをしているものと思われる。以下「雞鳴」にはない末尾の箇所を示す。

- | | |
|----------|--------------|
| 25 大婦織綺羅 | 大婦は綺羅を織り |
| 26 中婦織流黃 | 中婦は流黃を織る |
| 27 小婦無所爲 | 小婦 為す所無く |
| 28 挾瑟上高堂 | 瑟を挟んで高堂に上る |
| 29 丈人且安坐 | 丈人 且く安坐せられよ |
| 30 調絲方未央 | 糸を調べて方に未だ央きず |
- 蕭滌非によれば、「相逢行」は後漢の富貴の家の淫楽を譏刺する作であろうという。
- これらの歌と「帰園田居」の連作との関連はどこに、またそこにいかなる意味を求めうるものであろうか、章を改めて検討したい。

三

「帰園田居」の其二、其三の詩を掲げて、そこに前述した楽府古辞「雞鳴」および「相逢行」との関連を示唆する表現がないか、検討を加えたい。

帰園田居 其二

- | | |
|----------|-------------|
| 1 野外罕人事 | 野外 人事罕に |
| 2 窮巷寡輪鞅 | 窮巷 輪鞅寡し |
| 3 白日掩荆扉 | 白日 荆扉を掩し |
| 4 虛室絶塵想 | 虛室 塵想を絶つ |
| 5 時復墟曲中 | 時に復た墟曲の中 |
| 6 披草共來往 | 草を披いて共に來往す |
| 7 相見無雜言 | 相い見て雜言無く |
| 8 但道桑麻長 | 但だ道う 桑麻長すと |
| 9 桑麻日已長 | 桑麻 日に已に長じ |
| 10 我土日已廣 | 我が土 日に已に広し |
| 11 常恐霜霰至 | 常に恐る 霜霰の至り |
| 12 零落同草莽 | 零落して草莽に同じきを |

第一段落（冒頭から四句）は、高官の訪問の車馬もない世事の煩雑から遠い、園田居の静謐な環境に、白昼から柴の戸を閉ざし、虚室に俗念を絶ってひとり悠悠自適の情を

たのしむことをいう。

第二段落（第5句から四句）園田居の村里における農民との日頃の交流をいう。草を押しわけて行き來するが、顔を合わせても桑麻の生育の具合が話題になるだけである。

第三段落（第9句から四句）桑麻は日々生長し、畑は日々広がって心配はないが、霜や霰が来て作物を凋み枯らし、雑草と同じにしてしまわないかということだけが気がかりなのだ、と結ぶ。

この詩は作者の園田居での環境と村人との交流と心情とを具体的に述べている。

帰園田居 其三

- | | |
|---------|-------------------|
| 1 種豆南山下 | 豆を種う 南山の下 |
| 2 草盛豆苗稀 | 草盛んにして 豆苗稀なり |
| 3 晨興理荒穢 | 晨に興きて 荒穢を理め |
| 4 帶月荷鋤歸 | 月を帶び 鋤を荷いて歸る |
| 5 道狹草木長 | 道狭くして 草木長じ |
| 6 夕露沾我衣 | 夕露 我が衣を沾す |
| 7 衣沾不足惜 | 衣の沾うは惜しむに足らず |
| 8 但使願無違 | 但だ願いをして違ふこと無からしめよ |

第一段落（冒頭二句）南山のふもとに豆を蒔きつけたが、草ばかり茂り豆の苗はまばらに生えているだけであると述べている。これについては古来、漢の楊惲が宮中で失職し、帰田して大いに莊園経営を始めると、友人が世間の目をはばかりて暮らすべきだと戒めたが、楊惲は返書を送り、その中で「彼の南山に田し、蕪穢治めず。一頃の豆を種うれば、落ちて其と為る。人生は行楽のみ、富貴を須つも何れの時ぞ」という詩をうたったことを、作者が典拠として用い、そこに寓意を託したのだといわれている。⁽⁸⁾筆者は、陶淵明が楊惲の農作の苦勞と帰田して得ることができた自由闊達な氣概を酌みとって、この故事を踏まえつつ自らの農事をうたったのではないかと思う。

第二段落（第3〜第6句）豆の生長を願い、払曉に畑に行き、月とともに家路につく、帰途道が狭く、夕露に衣の裾がぐつしよりと濡れる。

第三段落（末尾二句）衣が濡れるのは惜しまない、ただ願いが違うことのないようにと念ずるだけである。

きわめて簡潔質朴の表現で、そこに作者の願いが凝縮して深い味わいがある。

さて古人は其二・其三の詩について、「前に桑麻を言い、此に豆を種うるを言う、皆田園中の実事にして、亦た次第

有り。」（清・査初白著、張載華輯《白初菴詩評》卷上）、
「〔帶月〕の句、真にして警、詩中に画有りと謂う可し。」

（清・温汝能纂集《陶詩彙評》卷二）などの評を加えている。其二・其三の詩が、作者の田園のくらしから生まれていることは疑いが無い。しかし、その表現がすべて実事実景に基づくものか否かは慎重に考えてみなければならぬ。

其三の名句「帶月荷鋤歸」の「荷鋤」の語について考察を加えよう。前述乙の文帝の詔のことは「邊民父子荷兵日久」とは、匈奴の侵入により辺境の農民の父子が「兵（武器）を荷う」防備の日が久しく続いていたこと、それが匈奴との和親策により一転し、文帝の善政への賛辭に評するように、人民は内外の繇（勞役・兵役）を免れ、田畝に肩を憩わせることができ、その結果「鋤を荷う」耕作のくらしに返ることができたのである。このように想像すると「荷鋤」の語は、戦争に駆られるおそれのない、平和な田園の耕作の安らぎ・よろこびを表出する、まことに深い含意をもつものではないか。梁・江淹（四四四〜五〇五）がその「雜體詩」三十首（文選卷第三十一 雜擬）に「陶徵君潜 田居」と題して「雖有荷鋤倦、濁酒聊自適」（鋤を荷いて倦むこと有りと雖も、濁酒もて聊か自ら適せり）と擬するのも、その秀逸な表現であることを認めてのうえで、

この語の使用にいたったものであろう。

陶詩には「荷鋤」とほぼ同意の「負耒」の語を用いた句がある。

晨出肆微勤 晨に出でて微勤を肆くし

日入負耒還 日入りて耒を負いて還る（庚戌の歳九月中西田に於いて早稲を穫す）

庚戌の歳は、義熙六年（四一〇）、淵明四十六歳である。『孟子』滕文公章句上に「陳良の徒陳相、其の弟の辛と耒耜を負いて、宋より滕に之く。」とある。これは移住する徒が農具をかつぎ運ぶのである。「負耒」は慣用のことば、対して「荷鋤」は詩語として新しく、また、より深い含意をもつように感じられる。

周知のように「雞鳴狗吠」の辞は、『老子』第八十章「雞犬之聲相聞」に淵源する。『史記』の貨殖列傳・律書の文がそれを典拠として用い、さらに雞鳴篇の冒頭の対句に用いられた。陶淵明の田園の平和な暮らしを願うたう「歸園田居」詩の連作は、こうしたことばと思想を受けて構想されたものといえよう。

陶淵明は上述のように、園田居に帰り南野の際に荒れ地を開墾し、桑麻の生長によるこび、豆の苗の稀なのに憂えた。そして時に草を披いて村人と来往して桑麻の生長を語

り、払曉から月が上るまで豆畑の除草に労苦を惜しまなかった。草を披き相見て雑言無き質朴の会話、月を帯び鋤を肩にしてつく家路の、草木長ずる狭い野の道、そうした自然な日常が、彼の近年見聞してきた都建康など、都会の塵雑な世界とは対極にあるという実感を深くしたにちがいない。それが樂府古辞の「狭路」（狭斜）「相逢」などにより象徴されるイメージを、批判的に潜在させた田園詩を制作させることになったのではないか。

以上「歸園田居」前半の三首は、樂府古辞との間に深い繋がりをもちものであるということがわかった。しかし一方両者をその質的な様相から識別するならば、対蹠的に相い隔たった存在といえよう。樂府古辞と「歸園田居」とでは、例えば一方が、都会の車馬の往来する繁華な狭路で出会った、権貴を誇る家の子弟の目も眩むばかりの豪勢なその家のさまを縷々として語るものであるのに対し、他方は南山のほとり、輪鞅寡き園田居の畑に通ずる山野の狭路で会う農夫と、ただ桑麻の生長の様子をことばにするだけの素朴な会話である。

狭路において相逢う者のうたというのが共通の主題だとするならば、上述の両者の質の隔たりは対蹠的といえよう。そこに陶淵明が「歸園田居」を樂府古辞に接点をもつ表現

をまじえて作った深い意図を見とることができると
思う。

四

『楽府詩集』卷第三十四「相和歌辞九」に劉宋・孔欣の
「相逢狭路間行」が録されてある。孔欣は会稽山陰の人、
晋に仕え、宋に入り国子博士となり、景平元年（四二三）
褚淡之に参軍として仕えているから、陶淵明より若い、
ほぼ同時代の人である。その作を掲げよう。

相逢狭路間行

- | | | | |
|----|-------|-------------|-----------|
| 1 | 相逢狭路間 | 相い逢う | 狭路の間 |
| 2 | 道狭正踟躕 | 道狭くして正に踟躕す | |
| 3 | 如何不羣士 | 如何ぞ | 不羣の士の |
| 4 | 行吟戲路衢 | 行吟して路衢に戯るるや | |
| 5 | 輟歩相與言 | 歩を輟めて | 相い与に言う |
| 6 | 君行欲焉如 | 君行きて | 焉くに如かんと欲す |
| | | るやと | |
| 7 | 淳朴久已凋 | 淳朴 | 久しく已に凋み |
| 8 | 榮利迭相驅 | 榮利 | 迭いに相い驅る |
| 9 | 流落尚風波 | 流落は | 風波を尚え |
| 10 | 人情多遷渝 | 人情は | 遷渝多し |

- | | | | |
|----|-------|----------------|---------|
| 11 | 勢集堂必滿 | 勢集まれば | 堂必ず滿ち |
| 12 | 運去庭亦虛 | 運去れば | 庭も亦た虚なり |
| 13 | 競趨嘗不暇 | 競趨して嘗て暇あらず | |
| 14 | 誰肯眷桑樞 | 誰か桑樞を眷みるを肯んぜんや | |

と

- | | | | |
|-----------------------------------|-------|---------------|------------|
| 15 | 無爲肆獨往 | 為す無かれ | 肆に独り往くを |
| 16 | 只將困淪胥 | 只だ將に淪胥に困しまんとす | |
| 17 | 未若及初九 | 未だ若かず | 初九と及に |
| 18 | 攜手歸田廬 | 手を攜えて | 田廬に帰り |
| 19 | 躬耕東山畔 | 東山の畔に躬耕し | |
| 20 | 樂道詠玄書 | 道を楽しみ玄書を詠ずるに | |
| 21 | 狹路安足遊 | 狹路 | 安んぞ遊ぶに足らんや |
| 22 | 方外可寄娛 | 方外こそ娛しみを寄す可し | |
| 全二十二句からなるこの一篇を三段落に分けてその概要を述べてみよう。 | | | |

第一段落（冒頭ゝ第6句）都会の繁華な狭路を、歩きながら吟ずる一見自暴自棄に陥っているかのごとき不羣の士を見とがめた語り手（作者としても可）が、きみはいったいどこへ行こうとしているのかと問いかける。

第二段落（第7句ゝ第14句）不羣の士の答え。今の世は淳朴の風は廃れ、榮誉利益のみ皆追い求め競争しあい、負

けて零落した者に一層風波が加わり、人情もそっぽをむき、権勢が集まった時、奥座敷には人が溢れ、運が去れば、庭に人々の姿はない。このように競争に明け暮れる毎日、桑のとはそのわが貧家を顧みるゆとりもないのだという。

第三段落（第15句～末尾）作者が不羣の士を戒め、別の生き方を勧める。このまま向こう見ずに突っ走る生き方は、ただ一身の破滅を招くに過ぎない。いっそ庶民（初九）と手を携え、帰田して躬ら耕し、道を楽しみ老子の『道徳経』を詠ずるのが賢明、都会の狭斜の路を浮遊するのは無意味、方外の境地こそ娛しむべき世界であるという。

上述のように孔欣の作は、淳朴が廃れ名利を追う世、都会の狭路にあつて人生行路に呻吟する有為の士に対し、故郷の東山のほとりに帰田して庶民とともに躬耕の暮らしに入り、道を楽しみ玄書を詠ずる生き方を勧めている。紙幅の関係から作品を掲げることが省略するが、晋の陸機（二六一～三〇三）「長安有狭斜行」、劉宋の謝惠連（四〇七～四三三）「相逢行」「長安有狭斜行」以下の『樂府詩集』に録する歴代の模擬作と比べても、欲望渦巻く都会生活を精算し、帰田して躬耕する園田生活を勧める孔欣の主張は異色といえるのではないか。そして軽薄な世相への批判と帰田躬耕を勧めるという点において、連作「帰園田居」前半三

首の詩と、ことがらを一般化して詠う樂府と個人的心情を訴える徒詩というジャンルの相違はあるものの、両者の間には処世観において相い類するところがある。孔欣の「相逢狭路間行」の存在は、それが「帰園田居」の連作の後の制作になるものであるとしても、陶淵明の連作の前半三首がある意味で「雞鳴」「相逢行」などの樂府古辞の発想、表現を受け継ぐ詩であるとする私見を支持する根拠になりうると思いたい。とは言え、孔欣の作は単に想念の世界に終わって、実現することがなかったものであろう。対して「帰園田居」の詩は、作者が渾身の力を振るい、虚妄の現実を振り捨てて、故郷に人生の真実をうちたてようと意図した記録である。この連作が、復帰しえた帰田躬耕のくらしを具体的に細部にわたって語っているのと対照的に、擲ってきた出仕の狭路での記憶はただ塵網、樊籠、塵想、雑言などの漠然と負の印象を与えることばでの表出にとどめていることは、作者の将来に対する期待と一抹の不安、そして過去に対する苦い想いとを物語るものであろう。

五

樂府古辞「雞鳴」がその冒頭に、至治の極を象徴する興として雞鳴狗吠の対句を据えたのに対し、陶淵明は園田居

の地こそ人民が戦争に苦しむことない至治の極でありたいと願ひ、其一の作中に「狗吠深巷中、雞鳴桑樹巔」の対句を据えたのであろう。さらに樂府古辭「相逢行」「長安有狹斜行」(紙幅の制約上ここでは省略したが内容は相逢行と類似する)が繁華な大都会の狹路間において遭遇した少年との對話から、その家の権貴驕奢な状況を知るといふ顚末を語るのに対し、「歸園田居」其二、其三の作中に「時復墟曲中、披草共來往、相見無雜言、但道桑麻長」「道狹草木長、夕露沾我衣」などと応じているのである。「少無適俗韻、性本愛丘山(略)開荒南野際、守拙歸園田(略)久在樊籠裏、復得返自然」(其一)と詠う陶淵明にとつて、園田居の故郷の地こそ、雞鳴狗吠の戦禍なき至治の極地でありたいと願つたのであろう。

さて、上述のように「歸園田居」の前半三首が樂府古辭を踏まえたうえで作られたとして、後半の其四、其五との繋がりをもとに考えればよいであろうか。紙幅の制約上、ごく簡略に考えの筋道だけ述べておきたい。

上述のように前掲の乙『史記・律書』の文は、文帝の対匈奴和睦策によつて、民も安らぎ、天下の和楽が実現したものであるから、戦乱のない平和の世を雞鳴狗吠の辞に託したのだといえよう。

ところで其四の作に、子姪の輩を携えて荒墟を歩いた作者が、昔人の居を認め、採薪者に「此の人焉くにか如く」と問うと、「死没して復た餘の無し」という返答に接し、深い感慨をもよおすところがある。当該の詩句を左に掲げる。

- | | | |
|----|-------|-------------|
| 3 | 試携子姪輩 | 試みに子姪の輩を携え |
| 4 | 披榛步荒墟 | 榛を披いて荒墟を歩む |
| 5 | 徘徊邱隴間 | 徘徊す 邱隴の間 |
| 6 | 依依昔人居 | 依依たり昔人の居 |
| 7 | 井竈有遺處 | 井竈 遺處有り |
| 8 | 桑竹殘舊株 | 桑竹 旧株残す |
| 9 | 借問採薪者 | 借問す 薪を採る者 |
| 10 | 此人皆焉如 | 此の人皆焉くにか如く |
| 11 | 薪者向我言 | 薪者 我に向かい言う |
| 12 | 死没無復餘 | 死没して復た餘の無しと |
- 昔人がのこる者なくみな死没したのは、作者が劉裕の参軍となり故郷を離れていた頃、尋陽を再三襲った戦乱ではなかったかと憶測をめぐらすのである。そしてこのように想像すれば、雞鳴狗吠の辞にこめた、作者の戦禍なき世への希求を通して、「歸園田居」の前半三首と後半二首の作が、一連の作として繋がりをもつものとなるのである。

また、「帰園田居」其三の詩に、古来典拠とされてきた漢の楊惲の故事において、隠居後の惲の自由のくらしぶりを諫めた友人孫会宗に対し、次のように抗言した。

丙 竊自思念、過已大矣、行已虧矣、長爲農夫以没世矣。

是故身率妻子、戮力耕桑、灌園治產、以給公上、不意當復用此爲譏議也。（略）臣之得罪、已三年矣。田家作苦、

歲時伏臘、享羊烹羔、斗酒自勞。家本秦也。能爲秦聲。

婦趙女也、雅善鼓瑟。奴婢歌者數人、酒後耳熱、仰天拊

缶而呼烏烏。其詩曰（略）是日也、拂衣而喜、奮袖低昂、

頓足起舞、誠淫荒無度、不知其不可也。

窃かに自ら思念えらく、過ち已に大なり、行い已に虧

けたり。長く農夫と爲り、以て世を没えんと。是の故に

身ずから妻子を率い、力を戮せて耕桑し、園に灌ぎ産を

治めて、以て公上に給す。意わざりき當復此を用つて譏

議を爲さんとは。（略）臣の罪を得るや、已に三年なり。

田家苦を作し、歳時・伏臘に、羊を烹、羔を炮り、斗酒

もて自ら勞う。家は本秦なれば、能く秦声を爲す。婦は

趙女なれば、雅より善く瑟を鼓す。奴婢の歌う者數人、

酒後耳熱すれば、天を仰ぎ缶を撫ち鳴鳴と呼ぶ。其の詩

に曰く（略）是の日や、衣を払つて喜び、袖を奮つて低

昂し、足を頓み起ちて舞う。誠に荒淫は度無きも、其の

不可なるを知らざるなり。（『漢書』卷六十六「王誅・楊敞傳」の敞の子忠の弟惲の伝）

世俗の羈絆を外れ、自由を得た楊惲の自負が伝わってくる。それは筆者の眼には、「帰園田居」其五の詩の「我が新たに熟せる酒を漉し、隻雞もて近局を招く。日入りて室中闇く、荊榛もて明燭に代う。歎び来たりて夕べの短きに苦しみ、已に復た天旭に至れり。」と詠うのに重なって映るのである。「帰園田居」其三と其五の詩が連携したと言えないであらうか。

淵明が其三の詩に「種豆南山下」として楊惲の詩に似たことばをつらねたのは、楊惲のおもいに共感するところがあつたのではないかと考えるのである。

注

（1）義熙二年丙午 有歸園田居詩五首。味其詩、蓋自彭澤歸明年所作也。（宋・王質等撰、許逸民校輯『陶淵明年譜』中華

書局 1986年）

（2）全詩語言質朴無華、毫無雕琢、卻景眞、情眞、意味無窮。

「狗吠」二句、襲用古樂府〈相和曲・雞鳴〉「雞鳴高樹巔、狗吠深宮中」、雖更換二字、卻不露痕跡、用了典像沒有用典一樣、貼切自然、恰到好處。（『新譯 陶淵明集』2010年5月 三民書局）

(3) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局 1983年）による。なおその引用文中の「書鈔」云々の詳細は以下の通りである。隋・虞世南撰『北堂書鈔』卷第一百一十二樂部八 倡優二十八名倡劉碧玉、自云倡家女（校註）古詩云、自云倡家女嫁爲蕩子婦。文選古詩十九首、自云作昔爲、嫁作今。」

(4) ①夫刑法非有所假貸、況正當此亂名之時乎？故戒蕩子以不可輕犯法網。亂名者、謂善惡無別、尊卑無序、即下文所叙僭越諸事。《爾雅・釋詁》：「協、服也。」柔協、猶柔服。《左傳》「伐叛、刑也。柔服、德也。」此蓋謂優柔姑息、爲亂名之漸。（62頁）②又王鳳于五侯、本屬同產、鳳卒後、以次當及平阿侯譚爲大司馬、乃鳳以其不附己、因以死保從弟音以自代、致譚・音二人構隙。其後、曲阿侯根復陰陷紅陽侯立、致立被遣就國、皆兄弟相忘之事也。要之此詩必有所刺、其所表現之時代、亦爲一驕奢僭侈之時代、而求之兩漢、厥爲五侯之事、適足以當之、則此篇固亦西漢末作品也。（63頁）（蕭滌非著・蕭海川輯補『漢魏晉六朝樂府文學史（增補本）』第二編 兩漢樂府 第三章 兩漢民間樂府、一 西漢民間樂府（四）《雞鳴》・（相和曲）人民文學出版社 2011年）

(5) 黃節撰『黃節詩學選刊 漢魏樂府風箋』（中華書局 2008年）の「卷一、漢風、相和歌辭、相和曲、鷄鳴」の黃節の「箋」。

(6) 『樂府詩集』卷第三十四、相和歌辭九 清調曲二「相逢行古辭」としていう。その原文は以下のである。一曰《相逢狹路間行》、亦曰《長安有狹斜行》。《樂府解題》曰：「古詞

文意與《雞鳴曲》同。晉陸機《長安狹斜行》云：『伊洛有岐路、岐路交朱輪。』則言世路險狹邪僻、正直之士無所措手足矣。」(7) 按《雞鳴》兼諷兄弟不相顧、此則專刺富貴家庭之淫樂、亦微有別。注(4)の書の「第三章 二 東漢民間樂府」参照。

(8) 宋・李公煥『箋註陶淵明集』に「前漢王惲傳、田彼南山、蕪穢不治、種一頃豆、落而爲箕、人生行樂耳、須富貴何時。」という。なお李注の「前漢王惲傳」とは、正しくは「漢書卷六十六 王楊傳」の「楊敞傳」中の敞の子の忠の弟の惲の伝を指す。

(9) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩 中』宋詩卷一「孔欣」の項に、「欣。会稽山陰人。仕晉。入宋爲國子博士。景平中、会稽太守褚淡之以爲參軍。有集九卷。」という。また、褚淡之の參軍になったことは、『宋書』『南史』の褚淡之の伝に記す。

※ 本稿は説陶詩会（2019年11月30日、於青山学院大学、代表大上正美氏）において、筆者が帰國田居其三を担当発表した際に陶淵明の方法の一端に気付き、それを発展させて成ったものである。会に参加の諸氏に感謝したい。2020年2月20日

（文教大学名誉教授）